

白山信仰について

宮下 幸夫

1. はじめに

白山信仰については、数多くの先学により述べられていて今さら何だという感も否めないが、考古学をかじった筆者なりにまとめてみたいと思う。

2. 白山信仰の起源

標高2,702メートルの御前峰を最高所とする白山は、周りに高い山がないことで孤峰であり、一年の半分は雪に覆われている。このことが平野から眺め、また、日本海を航行する舟よりよい目印となっていて、神々しい姿、また、雪が融けて水となり恵みをもたらすことより、古来より神が宿る山として崇められていた。これが白山信仰の起源と考えられる。



「白山山頂 御前峰(現在)」

3. 白山への入山

白山は、越の大徳と言われた越前の僧「泰澄」が養老元年(714)に初めて登り、修行して白山に住む神仏を感得し、山を開き、その後人々が登るようになったと伝えている。

当初は、修行(修験)のための入山で、禅定と言われていた。修験する者(修験者)は道無き箇所を登り、尾根から尾根へ渡り歩き、修行を行う。また、室町時代にさかんに行われていたらしい山稜(頂)巡行の者の痕跡が笈岳(1,841m)や三方岩岳(1,716m)、妙法山(1,775m)より見つかっている。

4. 禅定と三所権現

信仰の拠点として白山禅定の起点となる遙拝地が加賀馬場・美濃馬場・越前馬場であり、9世紀中頃には成立し、そこより頂上までの禅定道が出来た。

泰澄が感得したとされる白山三所権現とは、主峰御前峰は伊弉冉神で白山妙理大権現と号し、本地仏は十一面観音、大汝峰は大己貴神で本地仏は阿弥陀如来、別山は小白山別山大行事で本地仏は聖観音である。この神仏習合の信仰が定着したのは、11世紀後半以降と考えられる。



「白山山頂 奥宮のやしる」

5. 加賀馬場の勢力

こののち加賀馬場の中心は白山本宮(白山比咩神社)から別当寺の白山寺に実権が移り、同様に美濃馬場は長滝寺、越前馬場は平泉寺となり、平安末期には三馬場は比叡山延暦寺の末寺となった。その日吉七社にならって白山七社を整えたと考えられる。加賀馬場で

は、本宮・三宮・金劔宮・岩本宮の本宮四社と中宮・佐羅宮・別宮の中宮三社であり、これらは独自の発達を遂げつつ夫々連帯を保っていた。



「かつての白山山頂 御前峰」

「六道室跡」



本宮の勢力は手取川扇状地をおさえていて、中宮の勢力は別宮から峠を越えた能美郡の梯川地域から江沼郡をおさえていた。

別当寺である白山寺は、三か寺として那谷寺・温谷寺・栄谷寺、白山五院として栢野寺・温泉寺・極楽寺・小野坂寺・大聖寺、中宮八院として隆明寺・涌泉寺・善興寺・長寛寺・護国寺・晶隆寺・松谷寺・蓮華寺がある。いずれも中宮の勢力下の能美郡から江沼郡にかけて存在した。

修験から発達した白山登拝（信仰）も天台教学が入り、後、時宗や真言密教が入ってきて、徐々に変化していった。白山比咩神社蔵の『白山之記』には、北陸道は白山の敷地であり、三馬場の中でも加賀の優位性を主張した。しかし、現在の室堂は当時は越前の室であり、その立地からも禅定（頂上）は越前が支配権を行使したため、三馬場における禅定の祭祀権の対立は幕末まで続いた。

「馬の鼻も向かぬ白山権現」と恐れられた、白山寺・白山宮の力を見せつけたのが、安元事件である。国司の名代と中宮八院の一つの涌泉寺の争いは、神輿の上洛という強訴に打って出た白山の勝ちとなった。当時の国府は能美郡にあり、中宮八院はそれを取り巻くように配置され、国衙勢力と対峙していた。

6. 明治の神仏分離

白山三所権現という神仏習合も全国の例にもれず、明治の神仏分離により、白山本宮は白山比咩神社となり、菊理媛神・伊弉諾神・伊弉冉神を祀る神社となった。頂上は白山比咩神社の敷地、すなわち加賀の地となった。幸いにもこの時の廃仏毀釈を免れ、頂上その他各所にあった仏像は、現在、白峰の林西寺や尾添白山社などに下山仏として納められている。



「大汝峰頂上」

尚、江戸時代になって本宮が藩主前田家の祈祷所として復興され、藩命で山は白山（ハクサン）、社は白山（シラヤマ）と区別されるようになり、本宮だけがシラヤマヒメジンジャ（白山比咩神社）と訓し、山はハクサン、頂上奥宮もハクサンオク（ノ）ミヤ（オクグウ）、全国の末社もハクサンジンジャと号すようになった。



「大汝峰頂上 大汝神社やしろ横の石仏類」



「別山頂上」

7. 白山信仰の遺跡

白山信仰のおおまかな流れを述べてきたが、ここで筆者の考古学の観点から述べてみたい。

白山山頂遺跡として、御前峰山頂・大汝峰山頂・別山山頂があり、その他泰澄が修行したとの伝承がある転法輪窟や高堂平・六地藏跡（六堂室跡）・黒ぼこ岩周辺・南竜が馬場などより遺物が採集されている。また、禅定道沿いの各室跡には建物の痕跡があり、四塚には大小8基のケルンが見られる。

1986・1987年の白山比咩神社・國學院大學・石川考古学研究会による白山山頂学術調査や登山者によりかなりの遺物が見つかっている。

主な遺物採集地点は、御前峰・大汝峰・室堂平であり、懸仏や仏頭・飾金具・鈴等の銅製品、鉄剣や刀子・独鈷・鱧口・火打鎌・釘等の鉄製品。石仏・光背・狛犬等の石製品や須恵器・土師器・中近世陶磁器等が出土している。中でも釘は多量に採集されている。鉄製釘は1,000点近くあり、各地点に建物が建てられ



「別山頂上 別山神社のやしろ」



「四塚のケルン」

ていたことを物語っている。また、飾金具の留め金として使われた可能性のある青銅製の釘も100点を超える量が採集されている。さらに古銭も200枚近くある。

また、御前峰からは経石がやまとまって発見されていて、経塚があったと推定される。別山山頂からは、鋳銅製の経筒と経巻が見つかっており、やはり経塚の存在が認められる。また、灰釉小瓶（10世紀代）や鉄剣や鉄刀・刀子なども発見されている。

これらの遺物から年代をみると（主に陶磁器）、9世紀後半代が最も古く須恵器・灰釉陶器があり、量も比較的多い。10世紀前半は無く、10世紀中から11世紀にかけて灰釉陶器が多量にあり、11世紀末から12世紀前半も多い。これらは美濃製品が多く、越前や畿内のものも見られ、中国の製品も存在する。加賀の製品は殆んど見られない。

このことより、泰澄大師の伝承はともかく、平安時代中頃より人々が登っていた痕跡が見出せる。それも美濃方面からの入山が多い。

その他、白山信仰の山頂巡行の遺跡として捉えられるものに、白山山頂より北の連峰上の妙法山の山頂より銅製の小箱が小さな石室に納められて見ついている。これも経塚と考えられている。また、更に北の三方岩岳の岩窟より中国製の小瓶（13世紀）が出土していて、これは山頂巡行の修行僧が一時的に滞在した修行窟と考えられている。

さらに北の笈ヶ岳からは、明治39年に三角点設営中に山頂より経塚が発見され、永正15年（1518）銘の銅製経筒2口と懸仏などの小仏像5軀、御正躰鏡2面、鉄製武器約60点が出土した。これは1国に1部ずつ法華経を書写し奉納する六十六部廻国納経であり、一つには大聖寺の僧善養坊ら12人が埋納し、13回目の笈ヶ岳登拝であることが記されていた。また、本会の三谷幹雄氏により昭和49年に頂上部より鉄製小刀が採集され、現在石川県立歴史博物館に収められている。



「笈ヶ岳頂上」

8. まとめ

白山は前述のように神が宿る山として崇められていた。自然が多く残る山、それは聖なる存在であり、白山神とその従者の住まいであり、ゆえに山全体が崇高な存在で、聖域とした。そこに至るため難航苦行する修験の行者は、その達成で験力が高まるということで、あとに続くものが出る。このことが未来永劫続くという白山信仰の体系が整ったのは平安時代末から鎌倉時代前半であろうことは出土品からもうかがうことが出来る。

そのため、神が宿る山、従者の住まいであると言われる自然は、人が入山してより1000年近くそのために破壊を免れ、今に残っている。それを現代の者が壊してよいものだろうか。白山に登る人は、この豊かな自然が、ほんの少しの間の人間の行為で破壊されてしまうことを自覚してほしい。